

杜甫の五言「拗律」について（上）

丸 井 憲

- （一）はじめに
- （二）詩律と拗體
- （三）杜甫の五言「拗律」に見られる特徴（創作期別）
 - 1. 吳越・齊趙・洛陽期
 - 2. 長安・奉先・白水・鄜州・鳳翔・華州期
 - 3. 秦州・同谷期
 - 4. 成都期
 - 5. 梓州・綿州・閬州期
 - 6. 成都・戎州・忠州・雲安期
 - 7. 夔州前半（西閣）期
 - 8. 夔州後半（瀘西・東屯）期
 - 9. 江陵・公安・岳州・衡州・潭州期
- （四）杜甫が拗體を驅使したねらいは何か
- （五）おわりに

（一）はじめに

杜甫がものした五言律詩六二七首⁽¹⁾の平仄を仔細に見ると、詩律（近體詩における平仄や粘對などの規則を指す）に合わない箇所のある作品が實に三五一首にもものぼるが、これらをすべて拗體（ようたい）の五言律詩、あるいは五言「拗律」（ようりつ）と定義してよいかどうかは議論のあるところである。なぜならば、この三五一首中にはいわゆる「挟み平」となっている句や、その他さまざまな「拗救」（ようきゅう）の處置を施された句や聯が數多く含まれているからである。しかしそれらは、たとえば上句で拗字を使ってしまったから、下句で再び拗字を用いて上句とのバランスを取った、という受動的な理由からなされたとはばかりは言い切れないものが多く、むしろ杜甫は進んで、あるいは好んで拗字を驅使して拗句・拗聯を多作し、律詩本來の嚴格な詩律からは逸脱してでも、別種朗々誦すべき新たな抑揚と調子とを創出する試みを行っていたかのように思われる。

本稿ではまず、杜甫の五言律詩全作品の平仄の分布を詳細に調査し、各種拗句・拗聯などの頻度を算出するが、單なる數量や比率の提示に止まらず、杜甫の詩律上の嗜好や意圖を探るのがその本來の目的である。特に、杜甫の詩律上のそうした嗜好や意圖が、その生涯のどの時期に、いかなる状況において最も顯著に現れるかを知ることが、大變意味のあることであろう。とともに、杜甫とはほぼ同時代の代表的な宮廷詩人らの五言律詩の平仄分布を調査し、杜甫のそれとを嚴密に比較することによって、杜甫の五言「拗律」の特徴がより鮮明になるものと思われるが、その考察は次稿（下篇）に譲ることにしたい。

なお、底本には詩體別編集と編年體とを併用した清・浦起龍の『讀杜心解』を用いるが、本稿で「拗律」の考察に供した作品例については、清・仇兆鰲の『杜詩詳註』をもあわせて参照し、異同のある場合には言及することにした。なお、各詩題の前に付した番號は、『讀杜心解』卷三の五言律詩の編集順序に従って筆者が施したものである。

（二）詩律と拗體

中國古典詩歌において詩律が意識され始めたのは永明期（四八三～四九⁽²⁾）であるが、その後、初唐の杜審言（六四五？～七〇八）、沈佺期（六五六？～七一五？）、宋之問（六五六？～七一三？）らの努力によって、近體詩はほぼその確立をみた。それを藝術的な完成にまで導いたのが杜甫であると一般にいわれているが、杜甫はその完成と同時に、詩律における新たな試みもいろいろと行なっていた。その一つがここにいる「拗律」すなわち拗體の律詩である。そしてこれに關する議論を最も早く提起したのは宋末元初の文人・方回（一二二七～一三〇七）であり、その著『瀛奎律髓』の卷之二十五は「拗字類」と題され、ここで方回は、杜甫をはじめとする唐宋の詩人の「拗律」作品に對する論評を展開している。その後、清代に至ると、この方面に關する研究が再び盛んになり、趙執信（一六六二～一七四四）の『聲調譜』などの專著が現われたほか、清・紀昀（一七二四～一八〇五）もその著『瀛奎律髓刊誤』のなかで「單拗法」「雙拗法」などといった拗體の手法に言及している。また、馮舒（一五三九～一六四九）・馮班（一六〇二～一六七一）父子、許印芳（一八三二～一九〇一）らの論客も、方回の「拗字類」の議論に加わる形でのおの自説を展開していることは、李慶甲氏の集評校點になる『瀛奎律髓彙評』に散見されたとおりである。

そもそも「拗律」とは何を指すのか。古來、「拗律」の定義は論者によって一定しなかった。そうした状況を受けて、王力氏はその著『漢語詩律⁽⁴⁾』において、詩律に對する網羅的かつ體系的な研究を行なった。本稿では同著の分類法や述語にほぼ準據しながら議論を進めていくことにしたい。

*

*

*

王力氏は『漢語詩律學』第一章「近體詩」の第六節「平仄的格式」において、平仄から見た五言律詩の句型は詰まるところ「仄仄平平仄」「仄仄平平」「平平仄仄」「平平仄仄平」の四種に歸着するとして、この四種について順にそれぞれ a 式、A 式、b 式、B 式と命名しているが、これらをそのまま日本の平仄符號表記に置き換えてみると、

a 式：●●○○● A 式：●●●○○ b 式：○○○●●
B 式：○○●●○

となる。そしてこれらの句型の一箇所でも平仄の合わないところがあれば、それを「拗」と呼ぶものと定義している。⁽⁵⁾だが王氏も説くとおり、B 式以外の句型の第一字はしばしば平聲・仄聲のいずれをも用いるのが實情であるから（王氏のいわゆる「甲種拗」⁽⁶⁾）、實際の句型はそれぞれ次のように表記できよう。

a 式：●●○○● A 式：●●●○○ b 式：●○○●●
B 式：○○●●○※

※ ●印は、本來は仄聲であるが、平聲をも用いることを表し、○印は、本來は平聲であるが、仄聲をも用いることを表している。

王力氏はさらに、仄起こり（仄起式）の五律には①首聯上句を押韻しない「aB, bA, aB, bA」型と②首聯上句を押韻する「AB, bA, aB, bA」型の二種類があり、平起こり（平起式）の五律には③首聯上句を押韻しない「bA, aB, bA, aB」型と④首聯上句を押韻する「BA, aB, bA, aB」型の二種類があると整理しているが、これらを再び日本の平仄符號表記で圖示し、あわせて杜甫の五律の實例を參考までに添えてみれば、次の

とおりになる。

パターン一：「仄起こり・首聯上句非押韻型」

（實例一：018「李監宅二首 其二」）

a：●●○○●／B：○○●●◎	（a：尚覺王孫貴／B：豪家意頗濃）
b：●○○●●／A：●●●○○	（b：屏開金孔雀／A：褥隱繡芙蓉）
a：●●○○●／B：○○●●◎	（a：且食雙魚美／B：誰看異味重）
b：●○○●●／A：●●●○○	（b：門闌多喜色／A：女壻近乘龍）

パターン二：「仄起こり・首聯上句押韻型」

（實例二：148「月夜憶舍弟」）

A：●●●○○／B：○○●●◎	（A：戍鼓斷人行／B：邊秋一雁聲）
b：●○○●●／A：●●●○○	（b：露從今夜白／A：月是故鄉明）
a：●●○○●／B：○○●●◎	（a：有弟皆分散／B：無家問死生）
b：●○○●●／A：●●●○○	（b：寄書長不達／A：況乃未休兵）

パターン三：「平起こり・首聯上句非押韻型」

（實例三：302「早花」）

b：●○○●●／A：●●●○○	（b：西京安穩未／A：不見一人來）
a：●●○○●／B：○○●●◎	（a：臘日巴江曲／B：山花已自開）
b：●○○●●／A：●●●○○	（b：盈盈當雪杏／A：豔豔待春梅）
a：●●○○●／B：○○●●◎	（a：直苦風塵暗／B：誰憂客鬢催）

パターン四：「平起こり・首聯上句押韻型」

（實例四：181「漫成二首 其二」）

B：○○●●◎／A：●●●○○	（B：江皋已仲春／A：花下復清晨）
a：●●○○●／B：○○●●◎	（a：仰面貪看馬／B：迴頭錯應人）
b：●○○●●／A：●●●○○	（b：讀書難字過／A：對酒滿壺頻）
a：●●○○●／B：○○●●◎	（a：近識峨眉老／B：知余懶是真）

本稿では、以上四つのパターンをもって五言律詩の詩律とみなし、この詩律から外れたものを五言「拗律」すなわち拗體の五言律詩と呼ぶことにする。なお、「拗救」の措置が採られている拗句や拗聯を含む作品についても、本稿では一律に「拗律」として論じることにした。尾聯の上

句にしばしば見られる「挟み平」をも、本稿ではあえて拗句としたが、その理由は後述する。

(三) 杜甫の五言「拗律」に見られる特徴（創作期別）

さて、杜甫の五言律詩に見られる拗聯は、その形態に應じて「aB式變例」群と「bA式變例」群の二つのグループに大別することができ、後者はさらに「下三連」型と「挟み平」型の二つのパターンに分けることができる。以下に、各グループに屬する變例の句型を列挙してみるが、①第三字が拗字になっている句型にはa、A、b、Bの各式名の右肩に「*」印を一つ施し（王氏のいわゆる「乙種拗」）、②第四字が拗字であるものには「*」印を二つ施し、③第三字・第四字ともに拗字の場合には「*」印を三つ施すことにした。

グループ I : 「aB式變例」群

上句

下句

a 式：●●○○● /B* 式：○○○●◎（乙種拗）…… I - 1

a 式：●●○○● /B* 式：●○○●◎（孤平拗救）…… I - 2 ※

※B式の第一字が仄聲になれば「●○○●◎」となり、第二字の孤平は重い禁忌であるから（王氏のいわゆる「丙種拗」）、この場合は必ず第三字の仄聲を平聲に換える（「乙種拗」）ことで、いわゆる「孤平拗救」の措置を採らなければならない。

a* 式：●●○○● /B 式：○○●●◎ …… I - 3

a* 式：●●○○●（乙種拗） /B* 式：○○○●◎（乙種拗）… I - 4

a* 式：●●○○●（乙種拗） /B* 式：●○○●◎（孤平拗救）
…………… I - 5 ※

※後述するとおり、I - 4 と I - 5 とが杜甫の五言「拗律」に特徴的な形態である。

a** 式：●●○○● /B 式：○○●●◎ …… I - 6

a** 式：●●○○● /B* 式：○○○●◎（乙種拗）…… I - 7

a** 式：●●○○● /B* 式：●○○●◎（孤平拗救）…… I - 8 ※

※王力氏は前掲書第一〇八頁において「丑類特殊形式是在 aB 式的聯語中，把 a 式出句的腹節下字改爲仄聲，同時把 B 式對句的腹節上字改爲平聲。換句話說，在五言裏，就改爲：仄仄平仄仄，平平平仄平」（傍點は筆者）と述べているが、これは本稿では I - 7 に該当する。I -

8 もこの「丑類特殊形式」に準ずるとしてよいであろう。

- a***式：●●●●● / B 式：○○●●◎ …………… I - 9
 a***式：●●●●● / B* 式：○○●●◎（乙種拗）…………… I -10
 a***式：●●●●● / B* 式：●○○●◎（孤平拗救）……… I -11※

※上句に仄聲を多用するのも杜甫の五言「拗律」の特徴の一つである。

なお、總じて下句（B式）の第四字が拗字になりづらいのは、そのあとの第五字が韻字であるためであろう。これは後述する「bA式變例」の下句（A式）においても同様である。

グループⅡ：「bA式變例」群

その一：“下三連”型（上句に「仄三連」もしくは下句に「平三連」を含む型）

- | 上句 | 下句 |
|-----------------|------------------------|
| b 式：●○○●● | / A* 式：●●○○◎（乙種拗）……Ⅱ-1 |
| b* 式：●○●●●（乙種拗） | / A 式：●●●○○◎……………Ⅱ-2 |
| b* 式：●○●●●（乙種拗） | / A* 式：●●○○◎（乙種拗）Ⅱ-3 |
| b** 式：●○○○● | / A 式：●●●○○◎……………Ⅱ-4 |
| b** 式：●○○○● | / A* 式：●●○○◎（乙種拗）…Ⅱ-5※ |

※このうちⅡ-3（「仄三連」＋「平三連」）は、稀ではあるが存在する。なお、Ⅱ-4は“下三連”を含まないが、実際に存在する型であるため列記しておいた。

その二：“挟み平”型（上句が王力氏のいう「子類特殊形式」＝「特拗」となる型）

- | 上句 | 下句 |
|----------------------|----------------------------|
| b***式：●○●○○●（子類特殊形式） | / A 式：●●●○○◎ …Ⅱ-6 |
| b***式：●○●○○●（子類特殊形式） | / A* 式：●●○○◎（乙種拗）……………Ⅱ-7※ |

※王力氏は前掲書第一〇〇頁において「子類特殊形式是把在本該用『平平仄仄仄』的五字句子改爲『平平仄仄仄』，……。換句話說，就是腹節的兩個字平仄互換；本是『平仄』，現在改爲『仄平』。」（傍點は筆者）と述べる。なお、Ⅱ-6のような「挟み平」が尾聯以外の聯においても頻出するのが、杜甫の五律における顯著な特徴の一つである。なお後述するとおり、Ⅱ-7のような「挟み平」と「平三連」がひと組になった聯も、稀ではあるが存在する。

筆者の統計では、杜甫の五言律詩六二七首（仄起こり四八〇首、平起こり一四七首）中、上記の「aB式變例」を含む作品は一五〇首（二三・九%）、そして「bA式變例」のうち「下三連」型を含むものは一三七首（二一・九%）、「挟み平」型を含むものは一九一首（三〇・五%）にのぼる。なお、失對（しっつい）が三首、失粘（しってん）が三首、孤平はB式上のそれ（●○○●●◎）を含むもの二首のほか、筆者が本稿で特に提起するb式上のそれ（●○○●●●）を含むもの計一八首を見いだすことができたが、これらについては作品制作年代順に逐次、言及することにしたい。

*

*

*

以下では、『讀杜心解』を底本として杜甫の五律を見ていくことにするが、浦起龍が同書で行なっている六期区分（卷三之一～六）は、おそらく編集上、作品数のバランスも考慮してなされたものであり、杜甫の創作時期の實情を正確に反映するものではない。よって本稿では、主として杜甫の滞在地およびその境遇を考慮し、九つの区分をなすことにした。すなわち、①吳越・齊趙・洛陽期〔開元期（七一三～七四一）から天寶四載（七四五）冬まで〕、②長安・奉先・白水・鄜州・鳳翔・華州期〔天寶五載（七四五）春から乾元二年（七五九）夏まで〕、③秦州・同谷期〔乾元二年（七五九）七月から同年十二月まで〕、④成都期〔乾元二年（七五九）十二月から寶應元年（七六二）八月まで〕、⑤梓州・綿州・閬州期〔寶應元年（七六二）九月から廣德二年（七六四）二月まで〕、⑥成都・戎州・忠州・雲安期〔廣德二年（七六四）三月から大曆元年（七六六）春まで〕、⑦夔州前半（西閣）期〔大曆元年（七六六）暮春から大曆二年（七六七）春まで〕、⑧夔州後半（瀼西・東屯）期〔大曆二年（七六七）暮春から同年十二月まで〕、⑨江陵・公安・岳州・衡州・潭州期〔大曆三年（七六八）正月から大曆五年（七七〇）冬まで〕、とした。以下では、各期における五言「拗律」の特徴を、関連する作品に即して考察していくことにする。

1. 吳越・齊趙・洛陽期〔開元期（七一三～七四一）から天寶四載（七四五）冬まで〕

杜甫のこの時期における五言律詩作品は合計一五首（001詩から015詩まで。仄起こり九首、平起こり六首）ある。このうち「aB式變例」を含む

ものが一首（六・六%）、「bA式變例・“下三連”型」を含むものが二首（一三・三%）、「bA式變例・“挟み平”型」を含むものは五首（三三・三%）を数える。習作期ともいえるこの時期の五律にすでに拗體が出現していることは注意に値しよう。

006「已上人茅齋」（平起こり・首聯上句非押韻型）

已公茅屋下	可以賦新詩	b : ●○○●●／A* : ●●●○○◎（律聯）
枕簟入林僻	茶瓜留客遲	a* : ●●●○○●／B* : ○○○●●◎（I-4）
江蓮搖白羽	天棘蔓青絲	b : ○○○●●●／A* : ○●●○○◎（律聯）
空忝許詢輩	難酬支遁詞	a* : ○●●○○●／B* : ○○○●●◎（I-4）

この詩は方回著『瀛奎律髓』卷之二十五「拗字類」の冒頭にも採られている「拗律」作品である。頷聯と尾聯はともに「aB式變例」の一種（I-4）に該当し、各句の第三字の平仄を逆轉して作られている。これは、杜甫の全創作期を通じて見られる五言「拗律」の特徴の一斑をすでに示している。方回は「拗字類」の序において、晩唐の詩人・許渾に特有のスタイルであると南宋の詩壇、特に江湖派の間でもはやされた「丁卯句法」が、實は杜甫に始まるものだと述べているが、これは具體的には下三文字が「上句：××●○○／下句：××○●◎」となる形態を指している。⁽¹²⁾なお、この詩のように對になっている例（I-4）が多く現れる以外に、上句のみ（I-3）もしくは下句のみ（I-1、I-2）となるケースもまま見られる。

014「暫如臨邑至嵎山湖亭奉懷李員外率爾成興」（平起こり・首聯上句非押韻型）

野亭逼湖水	歇馬高林間	b*** : ●○○●●／A : ●●○○◎◎（II-7）
鼉吼風奔浪	魚跳日映山	a : ○●○○●／B* : ○○●●◎◎（律聯）
暫遊阻詞伯	卻望懷青關	b*** : ●○○●●／A* : ●●○○◎◎（II-7）
靄靄生雲霧	惟應促駕還	a* : ●●○○●／B* : ○○●●◎◎（律聯）

この詩は首聯と頸聯が「bA式變例・“挟み平”型」の一種（II-7）であり、上句はいわゆる「挟み平」、王力氏のいう「子類特殊形式」（別稱「特拗」）に該当し、下句の「平三連」（「三平調」）との組合せになっている。この時期の杜甫の作品に「挟み平」型の拗句が少なくないのは、

盛唐期の詩壇においてこの句型がすでに律句に準ずるものと見なされていたことを裏付けるものであるが、杜甫の場合は、尾聯上句以外の箇所にもこの句型を大膽に用いているのが特色といえよう。本稿で「挟み平」をあえて拗句とした所以である。なお、「挟み平」に「平三連」を合わせたこの形は、杜甫の五律全創作期の中でも三例を数えるのみであるが、杜甫があえて詩律を崩しながら、新たな調子を模索していた跡が窺われるような作品である。

2. 長安・奉先・白水・鄜州・鳳翔・華州期〔天寶五載（七四六）春から乾元二年（七五九）夏まで〕

杜甫のこの時期における五言律詩作品は合計八一首（016 詩から 096 詩まで。仄起こり六八首、平起こり一三首）あるが、このうち「aB式變例」を含むものが二〇首⁽¹⁴⁾（二四・七％）、「bA式變例・“下三連”型」を含むものが一五首⁽¹⁵⁾（一八・五％）、「bA式變例・“挟み平”型」を含むものは二六首（三二・一％）を数える。これらの比率は、全創作期における出現頻度とほぼ同等と見なしてよい。なお、失對を含むもの一首（094「憶弟二首 其二」）、失粘を含むもの一首（095「得舍弟消息」）をそれぞれ見いだすことができた。B式上の孤平はないものの、b式上の孤平を含む作品が一首（091「觀兵」）存在する。このほか、B**式（○○●○○）の句が035「重過何氏五首 其三」と047「贈陳二補闕」にあることを指摘しておく。

062「一百五日夜對月」（平起こり・首聯上句非押韻型）

無家對寒食	有淚如金波	b***: ○○●○○／A*: ●●○○○(Ⅱ-7)
斫卻月中桂	清光應更多	a*: ●●●○○／B*: ○○○●○(Ⅰ-4)
此離放紅蕊	想像顰青蛾	b***: ●○●○○／A*: ●●○○○(Ⅱ-7)
牛女漫愁思	秋期猶渡河	a*: ○●●○○／B*: ○○○●○(Ⅰ-4)

この詩は、毎句に拗字を含み、およそ律詩の態をなさぬようにも見える。首聯と頸聯は「bA式變例・“挟み平”型」の一種（Ⅱ-7）で、上句はいわゆる「挟み平」、下句は「平三連」であり、さきの014「暫如臨邑至嵎山湖亭奉懷李員外率爾成興」と同様の形になっている。頷聯および尾聯は「aB式變例」（Ⅰ-4）であり、いわゆる「丁卯句法」の先駆けであって、さきの006「已上人茅齋」と同様の形である。つまりこの詩は、詩律の上でのみ言えば、上記の二詩を融合させて一詩としたものといえ

るだろう。さらに特筆すべきことは、この詩の頷聯は對句になっておらず、對偶の規則からも逸脱している。これは何を意味するのだろうか。單なる處置の誤りであろうか。あるいは、初唐から盛唐にかけて整えられ、完成された詩律というものを、杜甫はここで故意に崩しながら、律詩の新たな可能性を追求しようとしていたのであろうか。

066「喜達行在所三首 其三」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

死去憑誰報 歸來始自憐 a : ●●○○●／B : ○○●●◎（律聯）
 猶瞻太白雪 喜遇武功天 b* : ○○●●●／A : ●●●●◎（Ⅱ-2）
 影靜千官裏 心蘇七校前 a : ●●○○●／B : ○○●●◎（律聯）
 今朝漢社稷 新數中興年 b* : ○○●●●／A* : ○●○○◎（Ⅱ-3）

この詩は頷聯と尾聯に拗字を含み、ともに「bA式變例・“下三連”型」である。頷聯は上句のみ「仄三連」となる形（Ⅱ-2）であり、これは全創作期を通じて頻出する。一方、尾聯は「仄三連」＋「平三連」⁽¹⁶⁾（Ⅱ-3）型になっており、この型は全創作期において七例存在する。ちなみに「平三連」は全創作期中一六例を数えることができるが、これらについては各創作期の考察中に施した注釋を参照されたい。

086「獨立」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

空外一鷺鳥 河間雙白鷗 a*** : ○●●●●／B* : ○○●●◎（Ⅰ-10）
 飄飄搏擊便 容易往來遊 b* : ○○●●●／A : ○●●○○◎（Ⅱ-2）
 草露亦多涇 蛛絲仍未收 a* : ●●●○○／B* : ○○●●◎（Ⅰ-4）
 天機近人事 獨立萬端憂 b*** : ○○●○○／A : ●●●○○◎（Ⅱ-6）

この詩は八句のうち六句に拗字を含む。ことに首聯の上句は第三字および第四字が拗字であり、仄聲が四文字續き、およそ a 式の原型（●●○○●）を留めぬほどである。下句の B 式はこれを受けて第三字を拗字にし、平聲を多くしている。この聯は「aB式變例」の一種（Ⅰ-10）に該当し、上句全體の聲調を極力低く抑えて、下句で浮き上がらせる獨特の手法である。頷聯は上句が「仄三連」、下句は律句であるので、「bA式變例・“下三連”型」の一種（Ⅱ-2）に当たる。頸聯は「aB式變例」の一種（Ⅰ-4）、尾聯は「bA式變例・“挟み平”型」の一種（Ⅱ-6）となっている。

091 「觀兵」(平起こり・首聯上句非押韻型)

北庭送壯士 獵虎數尤多 b*: ●○●●●／A: ○●●○◎(b孤Ⅱ-2)
 精銳舊無敵 邊隅今若何 a*: ○●●○●／B*: ○○●●◎(Ⅰ-4)
 妖氛擁白馬 元帥待調戈 b*: ○○●●●／A: ○●●○◎(Ⅱ-2)
 莫守鄴城下 斬鯨遼海波 a*: ●●●○●／B*: ●○●●◎(Ⅰ-5)

この詩の頷聯と尾聯は「aB式變例」の一種(Ⅰ-4およびⅠ-5)である。この詩に特徴的なのは首聯の上句 b 式の形態(●○●●●)で、第一字と第三字がともに仄聲となっており、杜甫五律中には一八例を見いだすことができる。通常「孤平」と呼ばれるものは、B 式の第一字が仄聲となった形(●○●●◎)⁽¹⁷⁾を指す。本詩のこの b 式の例を「孤平」と呼びうるかどうかについて、筆者は明確な見解を持たないが、本稿ではこの句型を假に「b 式孤平・“仄三連”型」と命名しておく。

094 「憶弟二首 其二」(仄起こり・首聯上句非押韻型)

且喜河南定 不問鄴城圍 a: ●●○○●／A: ●●●○○◎(失對)
 百戰今誰在 三年望汝歸 a: ●●○○●／B: ○○●●◎(律聯)
 故園花自發 春日鳥還飛 b: ●○○●●／A: ○●●○◎(律聯)
 斷絕人煙久 東西消息稀 a: ●●○○●／B*: ○○●●◎(Ⅰ-1)

この詩の拗字は尾聯の下句にのみあり、尾聯は「aB式變例」の一種(Ⅰ-1)に該當する。ただこの詩は首聯が失對であり、明らかな拗聯である。失對の例は杜詩にはあまり多くなく、五律六二七首中では三首を数えるのみであるが、ここも故意にその効果を狙ったものとは思われない。首聯は地名を含んでいることから、單に地名固有の平仄に即して作句したものに相違なからう。

095 「得舍弟消息」(仄起こり・首聯上句非押韻型)

亂後誰歸得 他鄉勝故鄉 a: ●●○○●／B: ○○●●◎(律聯)
 直爲心厄苦 久念與存亡 b: ●○○●●／A: ●●●○○◎(律聯)
 汝書猶在壁 汝妾已辭房 b: ●○○●●／A: ●●●○◎(失粘)
 舊犬知愁恨 垂頭傍我牀 a: ●●○○●／B: ○○●●◎(律聯)

この詩には拗句はなく、律句で構成されているが、頷聯下句と頸聯上

句との間に失粘が見られる。失粘も全創作期中三首しかない。前詩とともに弟を想って詠んだ詩であるのは、偶然かもしれないが、公式の應酬詩とは異なる氣樂さが、失對、失粘という形になって現れているようでもある。

3. 秦州・同谷期〔乾元二年（七五九）七月から同年十二月まで〕

この時期における五言律詩作品は合計五六首（097 詩から 152 詩まで。仄起こり三八首、平起こり一八首）があるが、このうち「aB式變例」を含むものが二〇首⁽¹⁸⁾（三五・七％）、「bA式變例・“下三連”型」を含むものが一五首⁽¹⁹⁾（二六・八％）、「bA式變例・“挟み平”型」を含むものは二一首（三七・五％）を数え、これらの比率は他の創作期に比して有意に高かった。また、「b式孤平・“仄三連”型」を含むものが計六首（134「擣衣」、135「歸燕」、137「螢火」、144「空囊」、145「病馬」、152「送遠」）と、この時期に多數出現している。なお、この時期の五律の制作はほぼ秦州滞在期に集中しており、同谷以降はもっぱら古體詩を多作している。

さて、この時期には『秦州雜詩』という五言律詩二十首連作の組詩が存在するが、このうち「aB式變例」を含むものが三首⁽²⁰⁾（一五・〇％）、「bA式變例・“下三連”型」を含むものが四首⁽²¹⁾（二〇・〇％）、「bA式變例・“挟み平”型」を含むものは一〇首（五〇・〇％）であった。「aB式變例」を含む作品は全創作期の平均値に較べてかなり低かったが、その反面、いわゆる「挟み平」を含むものが半数にのぼった。むしろ特筆すべきは、『秦州雜詩』二十首ののちに現れる、詩題がほぼ二文字からなる五律詠物詩の連作二四首⁽²²⁾である。この二四首中、「aB式變例」を含むものが一七首⁽²³⁾（七〇・八％）、「bA式變例・“下三連”型」を含むものが一一首⁽²⁴⁾（四五・八％）、「bA式變例・“挟み平”型」を含むものは一〇首（四一・七％）であった。この高い比率は決して偶然ではあり得ず、明らかに杜甫の嗜好や創作意圖が見て取られる。以下、具體的な作品に即して見てみよう。

133「初月」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

光細弦欲上 ⁽²⁵⁾	影斜輪未安	a** : ○●○●● / B* : ●○○●● (I-8)
微升古塞外	已隱暮雲端	b* : ○○●●● / A : ●●●○○ (II-2)
河漢不改色	關山空自寒	a*** : ○●●●● / B* : ○○○●● (I-10)
庭前有白露	暗滿菊花團	b* : ○○●●● / A : ●●●○○ (II-2)

杜甫の五律の首聯上句にはしばしば特異な平仄の形態が現れがちであるが、この詩もまたそうである。第一句の第四字は平聲であるべきところを仄聲としていて、第三字の平聲が孤立する形であり、下句は B 式の「孤平拗救」型であるので、聯全體では「aB 式變例」の一種（I-8。王氏のいわゆる「丑類特殊形式」）に該當する。頷聯上句は「仄三連」、下句は律句。頸聯の上句は仄聲を多用する奇異な形（a*** 式）をなしており、さきの 086「獨立」の首聯上句にも見られた句型である。下句は第三字を平聲にしてこれを受けている。尾聯はふたたび上句が「仄三連」、下句が律句となっている。

134「擣衣」（平起こり・首聯上句非押韻型）

亦知戍不返	秋至拭清砧	b* : <u>●</u> ○ <u>●</u> ●● / A : ○●●○◎ (b 孤 II-2)
已近苦寒月	況經長別心	a* : ●● <u>●</u> ○● / B* : ●○ <u>●</u> ◎◎ (I-5)
寧辭擣衣倦	一寄塞垣深	b*** : ○○ <u>●</u> ○● / A : ●●●○◎ (II-6)
用盡閨中力	君聽空外音	a : ●●○○● / B* : ○○ <u>●</u> ◎◎ (I-1)

杜甫は首聯の上句を奇怪な拗句にして、読み手の意表を衝くことをあるいは好んだのかもしれない。ここは筆者のいわゆる「b 式孤平・“仄三連”型」であり、下句は律句。頷聯は「aB 式變例」の一種（I-5）、頸聯は上句のみ「挟み平」、尾聯は下句のみ B* 式の拗句である。

144「空囊」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

翠柏苦猶食	明霞高可餐	a* : ●● <u>●</u> ○● / B* : ○○ <u>●</u> ◎◎ (I-4)
世人共鹵莽	吾道屬艱難	b* : <u>●</u> ○ <u>●</u> ●● / A : ○●●○◎ (b 孤 II-2)
不爨井晨凍	無衣牀夜寒	a* : ●● <u>●</u> ○● / B* : ○○ <u>●</u> ◎◎ (I-4)
囊空恐羞澁	留得一錢看	b*** : ○○ <u>●</u> ○● / A : ○●●○◎ (II-6)

この詩の首聯と頸聯は「aB 式變例」の一種（いずれも I-4）であり、尾聯は「bA 式變例・“挟み平”型」（II-6）である。頷聯上句は「b 式孤平・“仄三連”型」であって、この連作中に特に多用されていることがわかる。

146「蕃劍」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

致此自僻遠	又非珠玉裝	a*** : ●●●●● / B* : <u>●</u> ○ <u>●</u> ◎◎ (I-11)
-------	-------	---

如何有奇怪	每夜吐光芒	b***: ○○●●●／A: ●●●○○◎ (Ⅱ-6)
虎氣必騰上	龍身寧久藏	a*: ●●●○○●／B*: ○○○●●◎ (Ⅰ-4)
風塵苦未息	持汝奉明王	b*: ○○●●●／A: ○●●○○◎ (Ⅱ-2)

この詩は、首聯の上句がみな仄字で構成されていることがまず目を引く。前述の 086 詩の首聯上句よりも徹底している。下句は B 式の「孤平拗救」型であり、聯としては「aB 式變例」の一種（Ⅰ-11）に該当する。頷聯上句は「挟み平」、頸聯は「aB 式變例」の一種（Ⅰ-4）である。尾聯は上句のみ「仄三連」。

152「送遠」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

帶甲滿天地	胡爲君遠行	a*: ●●●○○●／B*: ○○○●●◎ (Ⅰ-4)
親朋盡一哭	鞍馬去孤城	b*: ○○●●●／A: ○●●○○◎ (Ⅱ-2)
草木歲月晚	關河霜雪清	a***: ●●●●●／B*: ○○○●●◎ (Ⅰ-10)
別離已昨日	因見古人情	b*: ●○○●●●／A: ○●●○○◎ (b 孤Ⅱ-2)

この詩の首聯は「aB 式變例」の一種（Ⅰ-4）。頷聯上句は「仄三連」。頸聯はさきの 146「蕃劍」の首聯のごとき形であり、「aB 式變例」の一種（Ⅰ-10）に当たる。尾聯上句は「b 式孤平・“仄三連”型」であり、下句は律句となっている。

以上、秦州における詠物五言律詩群には程度の甚だしい「拗律」が頻出することがわかった。特に上句に仄聲を多用する傾向は、この時期においてより顕著となり、以後、杜甫の五言「拗律」における代表的な句型の一つとして定着していくのである。

4. 成都期〔乾元二年（七五九）十二月から寶應元年（七六二）八月まで〕

この時期における五言律詩作品は合計八〇首（153 詩から 232 詩まで。仄起こり六〇首、平起こり二〇首）あるが、このうち「aB 式變例」を含むものが一九首⁽²⁷⁾（二三・八%）、「bA 式變例・“下三連”型」を含むものも一九首⁽²⁸⁾（二三・八%）、「bA 式變例・“挟み平”型」を含むものは一七首（二・二%）を数える。出現頻度は、「挟み平」が若干低いものの、ほぼ全創作期の平均値に近いといえよう。なお、失對、失粘、B 式上の孤平がそれぞれ同一作品（173「寄贈王十將軍承俊」）上に存在した。また、224「屏跡

三首 其三」の首聯上句（「晚起家何時」）の第五字は平聲であり、一見「平三連」のような形態をなしているが、他の韻脚（「幽」「流」「愁」）とは異なっており、首聯上句押韻型とは見なしがたい。

173「寄贈王十將軍承俊」（平起こり・首聯上句押韻型）

將軍膽氣雄 臂懸兩角弓 B：○○●●◎／B：●○○●◎
(孤平・失對)

纏結青驄馬 出入錦城中 a：○○○○●／A：●●●○○
(失粘・失對)

時危未授鉞 勢屈難爲功 b*：○○●●●／A*：●●○○◎
(失粘・II-3)

賓客滿堂上 何人高義同 a*：○○●○○／B*：○○○○◎ (I-4)

この詩の首聯は失對であり、また下句はB式の典型的な孤平である。首聯下句と頷聯上句が失粘であり、頷聯上句と同下句とがまた失對、頷聯下句と頸聯上句がまた失粘である。頸聯は「bA式變例・“下三連”型」の一種（II-3）で上句は「仄三連」、下句は「平三連」の組合せである。尾聯は「aB式變例」の一種（I-4）となっている。失對・失粘を繰り返す甚だ異例な作品であり、杜甫五言「拗律」中でも他に例を見ない。

226「奉濟驛重送嚴公四韻」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

遠送從此別 青山空復情 a**：●●○○●／B*：○○○○◎ (I-7)

⁽²⁹⁾幾時杯重把 昨夜月同行 b**：●○○○○／A：●●●○○ (II-4)

列郡謳歌惜 三朝出入榮 a：●●○○●／B：○○●●◎ (律聯)

江村獨歸處 寂寞養殘生 b***：○○○○●／A：●●●○○ (II-6)

この詩の首聯はいわゆる「丑類特殊形式」。特異なのは頷聯上句で、第四字が平聲となっており、聯としては「bA式變例」の一種（II-4）である。尾聯上句は「狹み平」。

5. 梓州・綿州・閬州期〔寶應元年（七六二）九月から廣德二年（七六四）二月まで〕

この時期における五言律詩作品は合計八九首（233詩から321詩まで。仄起こり六七首、平起こり二二首）あるが、このうち「aB式變例」を含むも

のが二三首⁽³⁰⁾（二五・八%）、「bA式變例・“下三連”型」を含むものが二八首⁽³¹⁾（三一・五%）、「bA式變例・“挟み平”型」を含むものも二八首（三一・五%）を数え、それぞれ全創作期の平均値より若干高い。失對、失粘は存在しなかった。なお、b式上の孤平を含むもの三首（264「數陪李梓州泛江有女樂在諸舫戲爲豔曲二首 其二」、291「贈韋贊善別」、303「歲暮」）を見いだすことができた。

252「泛江送客」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

二月頻送客	東津江欲平	a**：●●●○●●／B*：○○○●●◎（I-7）
煙花山際重	舟楫浪前輕	b：○○○●●／A：○●●○◎（律聯）
淚逐勸盃下	愁連吹笛生	a*：●●●○●／B*：○○○●●◎（I-4）
離筵不隔日	那得易爲情	b*：○○○●●／A：●●●○◎（II-2）

この詩の首聯はいわゆる「丑類特殊形式」であり、聯全體としては「aB式變例」の一種（I-7）に当たる。頷聯は上下ともに律句。頸聯はふたたび「aB式變例」の一種（I-4）であり、尾聯は上句が「仄三連」、下句は律句である。

280「送竇九歸成都」（平起こり・首聯上句非押韻型）

文章亦不盡	竇子才縱橫	b*：○○○●●／A*：●●○●◎（II-3）
非爾更苦節	何人符大名	a***：○○○●●／B*：○○○●◎（I-10）
讀書雲閣觀	問絹錦官城	b：●○○●●／A：●●●○◎（律聯）
我有浣花竹	題詩須一行	a*：●●○●●／B*：○○○●◎（I-4）

この詩は平起こりであるから、bA式が首聯に来るが、ここのそれは上句とともに「下三連」型（II-3）となっている。頷聯のaB式も變例であり、ことに上句は前出の133「初月」の頸聯上句と同様の形。尾聯は「aB式變例」の一種（I-4）である。

291「贈韋贊善別」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

扶病送君發	自憐猶不歸	a*：○●●○●／B*：●○○●◎（I-5）
祇應盡客淚	復作掩荆扉	b*：○○○●●／A：●●●○◎（II-2）
江漢故人少	音書從此稀	a*：○●●○●／B*：○○○●◎（I-4）
往還二十載	歲晚寸心違	b*：●○○●●／A：●●●○◎（b孤II-2）

この詩の首聯は「aB式變例」の一種（I-5）、頷聯は上句のみ「仄三連」の「bA式變例」の一種（II-2）である。頸聯はふたたび「aB式變例」の一種（I-4）、尾聯の上句はいわゆる「b式孤平・“仄三連”型」で、下句は律句である。

319「自閩州領妻子却赴蜀山行三首 其一」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

汨汨避群盜 悠悠經十年 a* : ●●●○● / B* : ○○○●● (I-4)
 不成向南國 復作遊西川 b** : ●○●○○ / A* : ●●○○○ (II-7)
 物役水虛照 魂傷山寂然 a* : ●●●○● / B* : ○○○●● (I-4)
 我生無倚着 盡室畏途邊 b : ●○○●● / A : ●●●○○ (律聯)

この詩は首聯が「aB式變例」の一種（I-4）、頷聯は上句を「挟み平」、下句を「平三連」とする「bA式變例・“挟み平”型」の一種（II-7）。頸聯はふたたび「aB式變例」の一種（I-4）であり、尾聯は律聯である。

6. 成都・戎州・忠州・雲安期〔廣德二年（七六四）三月から大曆元年（七六六）春まで〕

この時期における五言律詩作品は合計五五首（322 詩から 376 詩まで。仄起こり三九首、平起こり一六首）あるが、このうち「aB式變例」を含むものが一八首（⁽³²⁾三二・七％）、「bA式變例・“下三連”型」を含むものが一二首（⁽³³⁾二一・八％）、「bA式變例・“挟み平”型」を含むものは一五首（二七・二％）を数える。「aB式變例」を含む詩の比率が高い。失對、失粘を含む詩はなかった。なお、367「懷錦水居止二首 其一」にはB**式○○●○○○（「柴門豈重過」）という形が見られた。

322「歸來」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

客裏有所適 歸來知路難 a** : ●●●●● / B* : ○○○●● (I-10)
 開門野鼠走 散帙壁魚乾 b* : ○○●●● / A : ●●●○○ (II-2)
 洗杓開新醞 ⁽³⁴⁾ 低頭著小冠 ⁽³⁵⁾ a : ●●○○● / B : ○○○●● (律聯)
 憑誰給麴蘖 細酌老江干 b* : ○○●●● / A : ●●●○○ (II-2)

首聯上句は五字すべて仄聲であり、下句は第三字を乙種拗とした形で、聯全體としては「aB式變例」の一種（I-10）にあたる。頷聯は上句のみ「仄三連」、聯全體としては「bA式變例・“下三連”型」の一種（II-2）。

頸聯は律聯で、尾聯は頷聯と同様の形である。

326「嚴鄭公階下新松得霑字」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

弱質豈自負	移根方爾瞻	a***: ●●●●●／B*: ○○ <u>○</u> ●◎ (I-10)
⁽³⁶⁾ 細聲聞玉帳	疏翠近珠簾	b*: ○○○●●／A: ●●●○◎ (律聯)
未見紫煙集	虛蒙清露霑	a*: ●●●○●／B*: ○○ <u>○</u> ●◎ (I-4)
何當一百丈	歛蓋擁高簷	b*: ○○ <u>●</u> ●●／A: ○●●○◎ (II-2)

この詩も前詩と同様、首聯上句はすべて仄聲、下句は「乙種拗」で、「aB式變例」の一種（I-10）に該当する。頷聯は律聯。頸聯は「aB式變例」の一種（I-4）、尾聯は上句が「仄三連」になっている。

350「去蜀」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

五載客蜀郡	一年居梓州	a***: ●●●●●／B*: ●○ <u>○</u> ●◎ (I-11)
如何關塞阻	轉作瀟湘遊	b: ○○○●●／A*: ●● <u>○</u> ○◎ (II-1)
萬事已黃髮	殘生隨白鷗	a*: ●●●○●／B*: ○○ <u>○</u> ●◎ (I-4)
安危大臣在	不必淚長流	b***: ○○ <u>●</u> ○●／A: ●●●○◎ (II-6)

この詩の首聯も、上句は五字すべて仄聲であり、下句は「孤平拗救」、聯全體としては「aB式變例」の一種（I-11）に該当する。頷聯は下句のみ「平三連」で、聯全體では「bA式變例・“下三連”型」の一種（II-1）にあたる。頸聯は「aB式變例」の一種（I-4）、尾聯は「bA式變例・“挟み平”型」の一種（II-6）である。

この時期の五言「拗律」からは、首聯上句に仄聲を多用する傾向をはっきりと確認できる。作爲なくしてできあがったものではないはずであり、杜甫の韻律上の嗜好が明確に現れてきている。

7. 夔州前半（西閣）期〔大曆元年（七六六）暮春から大曆二年（七六七）春まで〕

この時期における五言律詩作品は合計八七首（377 詩から 463 詩まで。仄起こり七〇首、平起こり一七首）があるが、このうち「aB式變例」を含むものが一二首（一三・八%）、⁽³⁷⁾「bA式變例」「下三連」型を含むものが一九首⁽³⁸⁾（二一・八%）、⁽³⁷⁾「bA式變例」「挟み平」型を含むものは二一首（二四・一%）

を数える。この時期、「aB式變例」の頻度がかなり落ちてはいるものの、さきに述べてきた首聯上句の仄聲多用という特徴は依然、明瞭に窺うことができる。失對、失粘を含む詩はなかった。b式上の孤平を含むものが四首(381「憶鄭南」、386「熱三首 其三」、418「洛陽」、439「江梅」)あった。なお406「西閣夜」にはB式第二字を仄聲にした○●●●◎(「逶迤白霧昏」という形も見られた。

442「孤雁」(仄起こり・首聯上句非押韻型)

孤雁不飲啄 飛鳴聲念群 a***: ○●●●●/B*: ○○●●◎(I-10)
 誰憐一片影 相失萬重雲 b*: ○○●●●/A: ○●●○◎(II-2)
 望斷⁽³⁹⁾似猶見 哀多如更聞 a*: ●●●○●/B*: ○○●●◎(I-4)
 野鴉無意緒 鳴噪亦紛紛 b: ●○○●●/A: ○●●○◎(律聯)

この詩の首聯は「aB式變例」の一種(I-10)、頷聯は上句のみ「仄三連」で、聯全體としては「bA式變例・“下三連”型」の一種(II-2)に該当する。頸聯は「aB式變例」の一種(I-4)、尾聯は上下句ともに律句である。

454「別崔湜因寄薛據孟雲卿」(仄起こり・首聯上句非押韻型)

志士惜妄動 知深難固辭 a***: ●●●●●/B*: ○○●●◎(I-10)
 如何久磨勵 但取不磷緇 b***: ○○●○●/A: ●●●○◎(II-6)
 夙夜聽憂主 飛騰急濟時 a: ●●○○●/B: ○○●●◎(律聯)
 荊州遇薛孟 爲報欲論詩 b*: ○○●●●/A: ●●●○◎(II-2)

この詩の首聯は「aB式變例」の一種(I-10)、頷聯は上句が「挟み平」、下句は律句の「bA式變例・“挟み平”型」の一種(II-6)に該当。頸聯は律聯、尾聯は上句のみ「仄三連」の「bA式變例・“下三連”型」の一種(II-2)に該当する。

460「入宅三首 其一」(仄起こり・首聯上句非押韻型)

奔峭背赤甲 斷崖當白鹽 a***: ○●●●●/B*: ●○○●◎(I-11)
 客居愧遷次 春色漸多添 b***: ●○●○●/A: ○●●○◎(II-6)
 花亞欲移竹 鳥窺新捲簾 a*: ○●●○●/B*: ●○○●◎(I-5)
 衰年不敢恨 勝概欲相兼 b*: ○○●●●/A: ●●●○◎(II-2)

首聯上句に仄聲を多用して読み手の意表を衝くことが、杜甫の嗜好もしくは意圖するところであったことは、ほぼ斷言してよいであろう。この詩の首聯も「aB式變例」の一種（I-11）で、下句は「孤平拗救」の形になっている。頷聯上句は「挟み平」、聯全體としては「bA式變例・“挟み平”型」の一種（II-6）。頸聯は「aB式變例」の一種（I-5）で、下句は「孤平拗救」の形。尾聯は上句のみ「仄三連」で、聯全體としては「bA式變例・“下三連”型」の一種（II-2）に該當する。

8. 夔州後半（瀘西・東屯）期〔大曆二年（七六七）暮春から同年十二月まで〕

この時期における五言律詩作品は合計一〇五首（464 詩から 568 詩まで。仄起こり八一首、平起こり二四首）があるが、このうち「aB式變例」を含むものが二四首⁽⁴⁰⁾（二二・九％）、「bA式變例」「下三連」型を含むものが一四首⁽⁴¹⁾（一三・三％）、「bA式變例」「挟み平」型を含むものは四三首（四〇・九％）を数える。「下三連」の頻度が低く、「挟み平」の頻度が高いのがこの時期の特徴であろう。失對を含む詩は一首（567「人日二首 其一」）、また b 式上の孤平を含むものが一首（468「暮春題瀘西新賃草屋五首 其五」）あった。なお、465「暮春題瀘西新賃草屋五首 其二」には「二年實飽聞」（●○○●●◎）という句があり、これはB式上の典型的な孤平に相當するが、B式孤平はさきの 173「寄贈王十將軍承俊」の例と併せて杜甫五律中では二例のみを数える。⁽⁴²⁾

536「日暮」（平起こり・首聯上句非押韻型）

牛羊下來久	各已閉柴門	b*** : ○○●○○●／A : ●●●○○◎(II-6)
風月自清夜	江山非故園	a* : ○●●○○●／B* : ○○○●●◎(I-4)
石泉流暗壁	草露滴秋根	b : ●○○●●●／A : ●●●○○◎(律聯)
頭白燈明裏	何須花燼繁	a : ○●○○●●／B* : ○○○●●◎(I-1)

この詩のように、平起こりの場合、b 式が首聯上句に来ることから、ここで「挟み平」の形をとることができる。聯全體としては「bA式變例・“挟み平”型」の一種（II-6）に該當。頷聯は「aB式變例」の一種（I-4）、頸聯は上下句とも律句で、尾聯は下句のみ「乙種拗」を含み、聯全體では「aB式變例」の一種（I-1）に該當する。

555 「戲作俳諧體遣悶二首 其一」(仄起こり・首聯上句非押韻型)

畏俗吁可怪 斯人難並居 a** : ●●○●●/B* : ○○○●●(I-7)
 家家養烏鬼 頓頓食黃魚 b*** : ○○●○●/A : ●●●○●(II-6)
 舊識能爲態 新知已暗疏 a : ●●○○●/B : ○○●●●(律聯)
 治生且耕鑿 只有不關渠 b*** : ○○●○●/A : ●●●○●(II-6)

首聯はいわゆる「丑類特殊形式」に当たり、「aB式變例」の一種(I-7)に該当する。頷聯は上句が「挟み平」、下句は律句で、聯としては「bA式變例・“挟み平”型」の一種(II-6)。頸聯は上下句ともに律句。尾聯は頷聯と同様、「bA式變例・“挟み平”型」の一種(II-6)に当たる。

567 「人日二首 其一」(平起こり?・首聯上句非押韻型)

元日到人日 未有不陰時 a : ○●●○●/A : ●●●○●(失對)
 冰雪鶯難至 春寒花較遲 a : ○●○○●/B* : ○○○●●(I-1)
 雲隨白水落 風振紫山悲 b* : ○○●●●/A : ○●●○●(II-2)
 蓬鬢稀疏久 無勞比素絲 a : ○●○○●/B : ○○●●●(律聯)

この詩は「失對」を含む例である。詩全體の平仄の配置に照らせば、首聯上句は平起こりであるべきであるが、第二字は仄聲、第四字は平聲となっている。下句は第二字が再び仄聲、第四字が平聲であるから、この聯は明らかな失對である。頷聯は下句のみ「乙種拗」であり、「aB式變例」の一種(I-1)。頸聯は上句のみ「仄三連」であり、「bA式變例・“下三連”型」の一種(II-2)に該当する。尾聯は律聯である。

9. 江陵・公安・岳州・衡州・潭州期〔大曆三年(七六八)正月から大曆五年(七七〇)冬まで〕

この時期における五言律詩作品は合計五九首(569詩から627詩まで。仄起こり四八首、平起こり一首)があるが、このうち「aB式變例」を含むものが一三首(二二・〇%)、⁽⁴³⁾「bA式變例・“下三連”型」を含むものも一三首⁽⁴⁴⁾(二二・〇%)、⁽⁴⁴⁾「bA式變例・“挟み平”型」を含むものは一五首(二五・四%)を数える。各種「拗律」句型の頻度は全創作期を通じての平均値にほぼ等しい。なお、失粘を含む詩が一首(619「北風」)存在したほか、b式上の孤平を含むものが三首(576「和江陵宋大少府暮春雨後同諸公及舍弟宴書齋」、610「入喬口」、619「北風」)あった。

576「和江陵宋大少府暮春雨後同諸公及舍弟宴書齋」（平起こり・首聯上句非押韻型）

渥洼汗血種 天上麒麟兒 b* : ●○●●●／A* : ○●○●○
 (b孤Ⅱ-3)

才士得神秀 書齋聞爾爲 a* : ○●●○●／B* : ○○●●○ (Ⅰ-4)

棣華晴雨好 綵服暮春宜 b : ●○○●●／A : ●●●○● (律聯)

朋酒日歡會 老夫今始知 a* : ○●●○●／B* : ●○●●○ (Ⅰ-5)

この詩の首聯上句は「b式孤平・“仄三連”型」、聯全體では「bA式變例・“下三連”型」の一種（Ⅱ-3）に該當する。頷聯は「aB式變例」の一種（Ⅰ-4）、頸聯は律聯、尾聯は「aB式變例」の一種（Ⅰ-5）である。

610「入喬口」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

漠漠舊京遠 遲遲歸路賒 a* : ●●●○●／B* : ○○●●○ (Ⅰ-4)

殘年傍水國 落日對春華 b* : ○○●●●／A : ●●●○● (Ⅱ-2)

樹蜜早蜂亂 江泥輕燕斜 a* : ●●●○●／B* : ○○●●○ (Ⅰ-4)

賈生骨已朽 淒惻近長沙 b* : ●○●●●／A : ○●●○● (b孤Ⅱ-2)

この詩の首聯は「aB式變例」の一種（Ⅰ-4）、頷聯は上句のみ「仄三連」。頸聯は首聯と同じ「aB式變例」の一種（Ⅰ-4）、尾聯上句は「b式孤平・“仄三連”型」であり、聯全體では「bA式變例・“下三連”型」の一種（Ⅱ-2）に該當する。

611「銅官渚守風」（仄起こり・首聯上句非押韻型）

不夜楚帆落 避風湘渚閒 a* : ●●●○●／B* : ●○●●○ (Ⅰ-5)

水耕先浸草 春火更燒山 b : ●○○●●／A : ○●●○● (律聯)

早泊雲物晦 逆行波浪慳 a** : ●●○●●／B* : ●○●●○ (Ⅰ-8)

飛來雙白鶴 過去杳難攀 b : ○○○●●／A : ●●●○● (律聯)

この詩の首聯は「aB式變例」の一種（Ⅰ-5）、頷聯は律聯、頸聯は「丑類特殊形式」であり、「aB式變例」の一種（Ⅰ-8）に該當する。尾聯は律聯である。

619「北風」（平起こり・首聯上句非押韻型）

北風破南極 朱鳳日威垂 b***: ●○●○○●／A: ○●●○○◎ (Ⅱ-6)
 洞庭秋欲雪 鴻雁將安歸 b: ●○○●●●／A*: ○●○○◎ (失粘・Ⅱ-1)
 十年殺氣盛 六合人煙稀 b*: ●○○●●●／A*: ○●○○◎
 (失粘・b 孤Ⅱ-3)
 吾慕漢初老 時清猶茹芝 a*: ○●●○○●／B*: ○○○●◎ (Ⅰ-4)

この詩は失粘と「b 式孤平・“仄三連”型」とを含む例である。首聯上句は「挾み平」、聯全體では「bA 式變例・“挾み平”型」の一種(Ⅱ-6)に該當。だが、頷聯上句の第二字は本來仄聲であり、第四字は平聲であるべきところであるが、守られておらず、明らかな失粘である。頷聯下句は「乙種拗」で、聯全體では「bA 式變例・“下三連”型」の一種(Ⅱ-1)に該當する。頸聯上句がふたたび頷聯下句と粘しておらず(失粘)、さらに頸聯上句は「b 式孤平・“仄三連”型」となっている。頸聯下句は「乙種拗」、よって聯全體では「bA 式變例・“下三連”型」の一種(Ⅱ-3)に當たる。尾聯は「aB 式變例」の一種(Ⅰ-4)である。

(四) 杜甫が拗體を驅使したねらいは何か

以上見てきたとおり、杜甫の五言律詩の半数以上が廣義の拗體に屬するのであるが、それらは平仄の配置が決して無秩序というわけではなく、そこには、初唐の後期に確立したとされる嚴格な詩律とは異なる、杜甫の嗜好や意圖によって再構築された平仄の配置が存在することがわかった。

平仄とは、いわば詩の抑揚であり、音樂に喩えれば旋律のようなものである。沈約(四四一～五一三)撰『宋書』卷六十八の「謝靈運傳論」には、

夫五色相宣、八音協暢、由乎玄黃律呂、各適物宜。欲使宮羽相變、低昂互節、若前有浮聲、則後須切響。一簡之內、音韻盡殊、兩句之中、輕重悉異。妙達此旨、始可言文。〔夫れ、五色相ひ宣べ、八音協ひ暢ぶるは、玄黃・律呂、各の物の宜しきに適ふに由る。宮羽をして相ひ變じ、低昂をして互に節あらしめんと欲せんか、若し前に浮聲有らば、則ち後には切響を須ふ。一簡の内、音韻 盡 く殊なり、兩句の中、輕重 悉 く異なる。此の旨に妙達せば、始めて文を言ふ可し〕(傍點は筆者)

とあり、「浮聲」、「切響」という措辭が目を引くが、これらはあたかも

「浮き揚がる音」、「切迫した響き」というごとくであろう。また、劉勰（四六五？～五二二？）撰『文心雕龍』第三十三の「聲律」にも、

凡聲有飛沈、響有雙疊。……沈則響發而斷、飛則聲颺不還。〔凡そ聲には飛沈有り、響には雙疊有る。……沈とは則ち響 發して斷ち、飛とは則ち聲 颺がりて還へらず。〕（傍點は筆者）

とあって、およそ聲調には「舞い揚がるもの」と「沈むもの」とがあることを述べている。

五言詩型は「一句三拍」の拍節リズム構造を有する。詩律に叶った五律の平仄を観察すると、あたかも四分の三拍子ないしは八分の六拍子のごとく音楽的な、均衡のとれた一定の旋律と抑揚とを持っていることに気づく。

パターン一：「仄起こり・首聯上句非押韻型」

—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
●●	○○	●×	○○	●●	◎×	○○	○●	●×	●● ●○ ◎×
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
●●	○○	●×	○○	●●	◎×	○○	○●	●×	●● ●○ ◎×

パターン二：「仄起こり・首聯上句押韻型」

—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
●●	●○	◎×	○○	●●	◎×	○○	○●	●×	●● ●○ ◎×
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
●●	○○	●×	○○	●●	◎×	○○	○●	●×	●● ●○ ◎×

パターン三：「平起こり・首聯上句非押韻型」

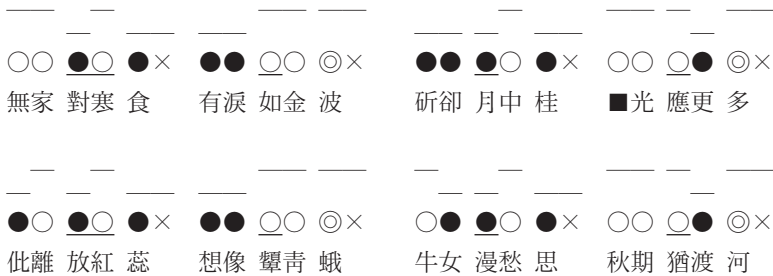
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
○○	○●	●×	●●	●○	◎×	●●	○○	●×	○○ ●● ◎×
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
○○	○●	●×	●●	●○	◎×	●●	○○	●×	○○ ●● ◎×

パターン四：「平起こり・首聯上句押韻型」

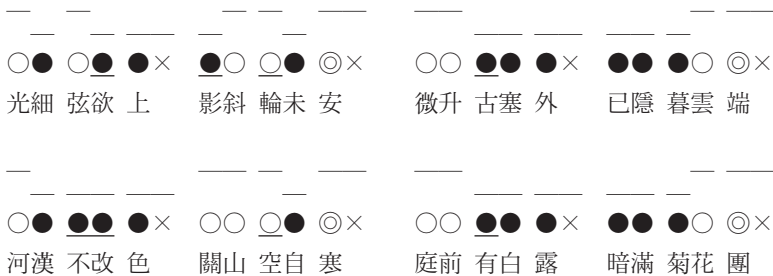


平仄符號の上に付した線は、その音の抑揚を示している。また「×」印は「休音」と呼ばれ、リズム上の真空を意味するが、その前の第五字の音程がなお續いているものと意識される部分である。⁽⁴⁵⁾どのパターンも音程の浮沈がほぼ一定の間隔で竝んでいることに気づくであろう。これに對して試みに杜甫の五言「拗律」作品の平仄に抑揚を付してみると次のようになる。

再掲：062「一百五日夜對月」（平起こり 首聯上句非押韻型）



再掲：133「初月」（仄起こり 首聯上句非押韻型）



一定していた抑揚の間隔は亂れ、その長短はまちまちであり、ところどころ佝屈な感をすら覚えしめるが、予測された抑揚とは異なるそれが

現れるところに、かえって読み手の意表を衝く効果がある。方回は『瀛奎律髓』卷之二十五「拗字類」の序において、杜甫の七言「吳體」の拗字の現れかたを「不止句中拗一字、往往神出鬼沒。雖拗字甚多、而骨格愈峻峭。」〔止だに句中一字を拗するのみならず、往往神出鬼沒なり。拗字甚だ多しと雖も、而して骨格愈々峻峭たり。〕と表現しているが、この評語はそのまま杜甫の五言「拗律」にも當てはまるだろう。詩律の固定的な抑揚から故意に逸脱することで、そこに新奇な抑揚の美を現出しようと、杜甫は目論んでいたのかもしれない。

（五）おわりに

杜甫の五言「拗律」作品は、習作期にその萌芽がすでに見られ、その後、秦州期の五律詠物詩群において高い比率をもって出現すると、成都期以降も一定の頻度を維持しながら制作されていった。杜甫の五言「拗律」作品に見られる特徴とまとめると次のようになる。

- ①「●●●●／●○○●◎」の形が頻出すること。これはときに「●●●●／●○○●◎」（丑類特殊形式）、ひいては「●●●●／●○○●◎」とまでなることがあり、主に仄起の五言「拗律」の首聯に頻用される。ここに杜甫の韻律上の嗜好や意圖が明瞭に窺われる。ただしこれらの形態の出現頻度は、創作期がくだるにつれて徐々に低下していく傾向が見られる。
- ②「●○○●●」（仄三連）が頻出するほか、「●●○○◎」（平三連）も一六例見られること。さらに「●○○●●／●●○○◎」（仄三連＋平三連）の組合せも七例存在すること。
- ③「●○○●●」は尾聯上句に限らず、他の上句でも頻繁に「●○○●●」（子類特殊形式、いわゆる「挟み平」）に変わることに。
- ④上句に「●○○●●」という形が一八例存在すること。なお、通常「孤平」と呼ばれるのは下句の「●○○●●◎」という形であり、杜甫の五律では二例のみ存在する。

次稿（下篇）では、杜甫とほぼ同時代に生きた代表的な宮廷詩人らの五言律詩の平仄分布を調査し、本稿（上篇）の考察結果と比較しながら、杜甫の五言「拗律」に見られる諸特徴が果たして同時代の詩人らと共有されていたのか、あるいは杜甫独自の創意によるものであったのかを、主として見ていくことにしたい。

【注】

- (1) 清・浦起龍著『讀杜心解』(全二冊)(北京:中華書局、一九六一年十月版)下冊卷三による。なお、同書には仄韻の五言律詩は取り上げられていない。仄韻の五言律詩については他日、稿を改めて論ずることにしたい。
- (2) 『南齊書・陸厥傳』に「永明末、盛爲文章。吳興謝朓・琅邪王融、以氣類相推轂。汝南周顒、善識聲韻。(沈)約等文、皆用宮商、以平上去入爲四聲、以此制韻、不可增減。世呼爲永明體。」とあるとおり、主に謝朓、王融、周顒、沈約らによって作詩における聲調が細かく規定され、世に「永明體」と呼ばれるようになった。
- (3) 元・方回選評、李慶甲集評校點『瀛奎律髓彙評』(上海:上海古籍出版社、二〇〇五年四月新一版)。
- (4) 香港:中華書局香港分局、一九七三年五月版。
- (5) 王力氏前掲書第九〇頁に「凡不合平仄格式的字，叫做『拗』，前人所謂『拗』，除了『二四六』的拗之外，只有五言第三字和七言第五字不合才叫做拗，又B式五言第一字和七言第三字用仄聲也叫做拗；普通五言的第一字和七言的第三字既可不論平仄，也就無所謂拗。現在我們爲方便起見，不管二四六或一三五，任何地位，不合平仄的都叫做拗。」(傍點は筆者)と述べている。
- (6) 王力氏前掲書第九〇頁に「七言第一字(頂節上字)，及A、a、b三式的五言第一字，又同式的七言第三字(頭節上字)的拗，可稱爲甲種拗。詩人對此，可以不避，也可以不救。」(傍點は筆者)と述べる。
- (7) 王力氏前掲書第九一頁に「詩人對於拗句，往往用『救』。拗而能救，就不爲『病』。所謂『拗救』，就是上面該平的地方用了仄聲，所以在下面該仄的地方用平聲，以爲抵償；如果上面該仄的地方用了平聲，下面該平的地方也用仄聲以爲抵償。」とある。
- (8) 王力氏前掲書第八八頁に「五言詩句第三字和七言詩句第五字(腹節上字)的平仄，以依照平仄格式爲正例，不依照平仄格式爲變例。」とあるが、本稿では五言の第三字に止まらず、およそ平仄の格式に合わない箇所を含むものをすべて「變例」と呼ぶことにした。
- (9) 從來、「拗律」の考察を行なう場合、句を單位とするものがほとんどであったが、筆者は基本的に聯を單位として考察した。なお、高島俊男氏の論文「初唐期における五言律詩の形成—特にその平仄配置について」(『日本中國學會報』第二十五集、第八七～一〇一頁)では、筆者が本稿で「變例」として扱った聯のうちの各句を「派生形」という呼稱で列挙している。
- (10) 王力氏前掲書第九〇頁に「五言第三字及七言第五字(腹節上字)的拗，可稱爲乙種拗。詩人對此，儘可能避免，否則儘可能補救。」(傍點は筆者)とある。
- (11) 王力氏前掲書第九〇頁に「B式五言第一字和七言第三字(頭節上字)的拗(即孤平)，可稱爲丙種拗。詩人對此，絕對避免，否則必須補救。」(傍

點は筆者）とある。

- (12) 方回『瀛奎律髓』卷之二十五「拗字類」の序の關係箇所を以下に掲げる。
「今『江湖』學詩者，喜許渾詩『水聲東去市朝變（●○○●●○○●），山勢
北來宮殿高（○●●○○○●◎）』，『湘潭雲盡暮山出（○○○●●○○●），巴
蜀雪消春水來（○●●○○○●◎）』，以爲丁卯句法。殊不知始於老杜，如
『負鹽出井此溪女（●○○●●○○●），打鼓發船何郡郎（●●●○○○●◎）』，
『龍光蕙葉與多碧（●○○●●○○●），點注桃花舒小紅（●●○○○○●◎）』
之類也。」（傍點、平仄符號および傍線は筆者）とあり、七言律詩を例に議
論を展開しているが、これらの句はすべて下線部分、すなわち下三文字に
一定した特徴（上句：××××●○○／下句：××××○●◎）が顯著に
見られる。
- (13) 残る二例は 062「一百五日夜對月」と 319「自閬州領妻子却赴蜀山行三
首 其一」に存在する。
- (14) 二〇首のうち、a 式上句と B 式下句がともに變例句となっている聯を含
む作品が實に一六首もある。これは杜甫の五律の、全創作期を通じてほぼ
變わらぬ比率である。また「丑類特殊形式」を含むものが一首（057「對
雪」）あった。
- (15) 一五首のうち、「平三連」を含むものが 017「杜位宅守歲」、062「一百五
日夜對月」、066「喜達行在所三首 其三」の三首あり、このうち 066「喜
達行在所三首 其三」は「仄三連」＋「平三連」の組合せを含んでいる。
- (16) 残る六例は 107「秦州雜詩 其十一」、173「寄贈王十將軍承俊」、280
「送竇九歸成都」、334「送舍弟穎赴齊州三首 其二」、576「和江陵宋大少
府暮春雨後同諸公及舍弟宴書齋」、619「北風」にある。
- (17) 孤平の定義は王力氏前掲書第五頁に「B 式的頭節上字必須依照規定，
限用平聲，也就是：1。五言的『平平仄仄平』不得改爲『仄平仄仄平』；…
（中略）…如果近體詩違犯了這一箇規律，就叫做『犯孤平』。因爲韻腳的平
聲字是固定的，除此之外，句中就單剩一個平聲字了。孤平是詩家的大忌。」
とあり、もっぱら B 式の第一字が仄聲となったもののみを指すようである。
- (18) 二〇首のうち、a 式上句と B 式下句がともに變例句となっている聯を含
む作品は一七首、また「丑類特殊形式」を含むものが二首（129「日暮」、
133「初月」）あった。
- (19) 一五首のうち、「平三連」を含むもの一首（107「秦州雜詩 其十一」）
が存在し、かつこれは「仄三連」＋「平三連」の組合せになっている。
- (20) 三首のうち、a 式上句と B 式下句がともに變例句となっている聯を含む
作品は一首のみであった。
- (21) 四首のうち、107「秦州雜詩 其十一」は「仄三連」＋「平三連」の組
合せになっている。
- (22) 『讀杜心解』卷三之二では、この二四首は 129「日暮」、130「東樓」、131
「山寺」、132「天河」、133「初月」、134「擣衣」、135「歸燕」、136「促織」、

- 137「螢火」、138「蒹葭」、139「苦竹」、140「除架」、141「廢畦」、142「夕烽」、143「秋笛」、144「空囊」、145「病馬」、146「蕃劍」、147「銅瓶」、148「月夜憶舍弟」、149「天末懷李白」、150「所思」、151「卽事」、152「送遠」の順に並んでいる。後半の五首は詠物詩とはいえないが、本稿では一應、連作に属するものと位置づけた。
- (23) 一七首のうち、a式上句とB式下句がともに變例句となっている聯を含む作品は一五首あり、また「丑類特殊形式」を含むものが二首(129「日暮」、133「初月」)あった。
- (24) 一首のうち、「平三連」は存在しなかった。
- (25) 『杜詩詳註』卷之七では「欲」を「初」に作るが、それならばこの上句は律句となる。
- (26) この時期の杜甫の五律作品にいち早く着目し、かつ緻密な考察を加えられた先行論文として、長谷部剛氏の「杜甫詩律小考(上)」がある(『中國詩文論叢』第十七集所收)。特に氏の「秦州期になって、『變格』五律は集中的に制作され、杜甫獨自の新しい詩律の試みとして結實した、と考えられる」(第九八頁)という指摘は、本稿が各創作期相互の比較研究を行なった結果によって、より確かさを増すものと思われる。
- (27) 一九首のうち、a式上句とB式下句がともに變例句となっている聯を含む作品は一〇首。また「丑類特殊形式」を含むものが一首(226「奉濟驛重送嚴公四韻」)あった。
- (28) 一九首のうち、「平三連」を含むもの三首(173「寄贈王十將軍承俊」、212「王竟攜酒高亦同過」、224「屏跡三首 其三」)が存在し、うち173「寄贈王十將軍承俊」は「仄三連」+「平三連」の組合せになっている。
- (29) 『杜詩詳註』卷之十一同詩の「重」字の注に「義從平聲、讀從去聲」とある。この注記に従うならば、この句は律句となる。
- (30) 二三首のうち、a式上句とB式下句がともに變例句となっている聯を含む作品は一九首。また「丑類特殊形式」を含むものが二首(252「泛江送客」、304「送李卿曄」)あった。
- (31) 二八首のうち、「平三連」を含むものが二首(280「送竇九歸成都」、319「自閬州領妻子却赴蜀山行三首 其一」)あり、このうち280「送竇九歸成都」が「仄三連」+「平三連」の組合せを含んでいる。
- (32) 一八首のうち、a式上句とB式下句がともに變例句となっている聯を含む作品は一三首。また「丑類特殊形式」を含むものが三首(330「獨坐」、349「春遠」、366「長江二首 其二」)あった。
- (33) 一二首のうち、「平三連」を含むものが334「送舍弟穎赴齊州三首 其二」、350「去蜀」の二首あり、このうち334「送舍弟穎赴齊州三首 其二」は「仄三連」+「平三連」の組合せを含んでいる。
- (34) 『杜詩詳註』卷之十三では「開」を「斟」に作るが、同じ平聲である。
- (35) 『杜詩詳註』卷之十三では「著小冠」を「拭小盤」に作るが、同じ平仄

順序である。

- (36) 『杜詩詳註』卷之十四では「聞」を「侵」に作るが、同じ平聲である。
- (37) 一二首のうち、a 式上句と B 式下句がともに變例句となっている聯を含む作品は一首。また「丑類特殊形式」を含むものが一首（386「熱三首 其三」）あった。
- (38) 一九首のうち、「平三連」は存在しなかった。
- (39) 『杜詩詳註』卷之十七では「斷」を「盡」に作るが、同じ仄聲である。
- (40) 二四首のうち、a 式上句と B 式下句がともに變例句となっている聯を含む作品は實に九首しかない。この比率は他の時期に比して有意に低い。また「丑類特殊形式」を含むものが一首（555「戲作俳諧體遣悶二首 其一」）あった。
- (41) 一四首のうち、「平三連」を含むものが 468「暮春題瀼西新賃草屋五首 其五」と 482「晨雨」の二首あったが、「仄三連」＋「平三連」の組合せはなかった。
- (42) 實はこの二例のほかに、116「秦州雜詩 其二十」頷聯下句に「應門亦有兒」（●○●●◎）という例が、また 542「獨坐二首 其二」頸聯下句にも「應門試小童」（●○●●◎）という例が見える。しかしこの二つの「應」字を、杜甫は平聲で読んでいたのではないかと筆者は疑うものであり、孤平の例にはあえて加えなかった。
- (43) 一三首のうち、a 式上句と B 式下句がともに變例句となっている聯を含む作品は七首しかなかった。なお、「丑類特殊形式」を含むものは二首（575「宴胡侍御書堂」、611「銅官渚守風」）あった。
- (44) 一三首のうち、「平三連」を含むものが 576「和江陵宋大少府暮春雨後同諸公及舍弟宴書齋」、619「北風」の二首あり、いずれも「b 式孤平・仄三連」＋「平三連」の組合せになっている。
- (45) 松浦友久「六朝新體詩から唐代近體詩へー『對偶性』と『拍節リズム』を中心にー」（『中國詩文論叢』第十七集所收）第四四頁參照。